２０１８．１１．２3

大草

読書メモ

99．石川文康「カント入門」筑摩書房（1995.5）

100．マイケル・サンデル「これから「正義」の話をしよう」（2010.5）

101．池田雄一「カントの哲学」河出書房（2006.6）

**＜石川文康「カント入門」から＞**

・哲学とは、「物事の真理を追求する学問」である。批判哲学とは、合理的認識能力に対する疑いである。フランシス・ベーコンは、理性が誤謬に陥り易いことを指摘している。

・カントが発見したことは、合理性が究極的に合理性に反するというパラドックスが存在することである。即ち、理性が理性自身の法則にのっとって推論を進めた結果、理性に反する結論に到達するという皮肉な現象が存在する。

・二つの相反する命題を同時に提示し、同時に証明すること。これを「超越論的弁証論」という。二律背反（アンチノミー）のテーマを解決するのである。

・肯定的命題を「テーゼ」といい、否定命題を「アンチテーゼ」という。カントは、以下の４つのアンチノミー（二律背反）を提示し、解決したとされる。

第一テーゼ：世界は空間・時間的に始まりを有する（有限である）。

アンチテーゼ：世界は空間・時間的に始まりを有しない（無限である）。

⇒カントは、この両方の説を否定する。始まりがあるとしたら、その始まりの前は何であったのか説明できないので、始まりがあるとするのは誤りである。一方、始まりがないとすると端にはさらに端がありこれが永遠に続きとらえることができないので、始まりがないとするのは誤りである。このような論理でテーゼもアンチテーゼも両方とも否定する。これで、両方を証明したとする理性とは、いかなるものか？（大草）

⇒現代の科学では、この世界（宇宙）にはビッグバンという始まりがあり、138億年経過しているとする説が有力であり、事実とみなされている。科学の進歩の前には、第一アンチノミー（二律背反）は成立しないのであり、人間の理性も役に立たないのではないか。無から有の生じるビッグバンは、色即是空の思想に似てはいないか？（大草）

第二テーゼ：世界の一切のものは単純な部分からなる。

アンチテーゼ：世界の一切のものは単純な部分からならない。単純なものではない。

（⇒第二テーゼ以下の解説は、省略）

第三テーゼ：世界には自由による因果性もある。

アンチテーゼ：世界には自由なるものは存在せず、全てが自然必然的法則によって起こる。

第四テーゼ：世界原因の系列の中には絶対的必然的存在者がいる。

アンチテーゼ：この系列の中には絶対的必然的存在者はいない。そこにおいては、全てが偶然である。

**＜マイケル・サンデル「これから「正義」の話をしよう」から＞**

　正義に関するやさしい哲学書である。カントに関する記載が分かり易くてよかった。

・カントにおける重要な三つの概念（道徳・自由・理性）の関係性を示す。

・道徳・自由・理性の関係性を二元論で説明する。

＜対比１．道徳＞

　義務　対　対向性　（行動に道徳的価値を与えられるのは義務の動機だけである）

＜対比２．自由＞

　自律　対　他律　　（自ら課した法則に従って行動することが自由であり自律である）

＜対比３．理性＞

　定言命法　対　仮言命法　（条件の付かない命題が定言命法である）

・功利主義者は、理性を功利のための道具として使った。そもそも、理性とは功利のために使うのではなく、追求する目的を決めるために使うものである。

・カントの考える理性は、道徳にかかわる実践理性であり、「いっさいの経験的目的にとらわれずに、ア・プリオリに法則を定める純粋実践理性」である。（P155）

・カントは、「定言命法のみが、道徳の命法たる資格を持つ」という。

・自律的自由を実践するためには、定言命法に従う必要がある。ほかの動機を伴わず、それ自体として絶対的に適用される実践的な法則、これのみが定言命法である。

・定言命法その１．：自分の格律を普遍化する。「汝の意思の格律が、常に同時に普遍的法則となるように行為せよ」

　EX.金がないのにすぐに返すと嘘を言って金を借りる約束することは、道徳的に皆がよいとは言わないため、普遍化できない。

・定言命法その２．：人格（人間性）を究極の目的として扱う。人格（人間性）とは、すべての人に平等に備わっている理性的能力への尊敬をさす。人格は、理性的な存在であり、絶対的・本質的な価値をもつ。「汝の人格においても、あらゆる他者の人格においても、人間性を単なる手段としてではなく、常に同時に目的として扱うように行為せよ」

　EX.①すぐに返せないのに返すからと嘘を言って金を借りるのは、相手を操っており相手を財布がわりに使っており、尊敬するに値する目的として扱っていない。

　②自殺も他殺も他者・自己の人間性を踏みにじる行為であり許されない。何かを得るための手段として殺すことになっている。

・道徳の基準を特定の利益や欲望（幸福の効用など）におこうとすると必ず失敗する。利益や欲望のために行動するという条件に縛られるため道徳法則となり得ない。

⇒何ら条件を付けずに、○○（ｅｘ寄付）を為せなどとの命題のみが、道徳の基準となるという。これが定言命法である。（大草）

**＜池田雄一「カントの哲学」から＞**

（カント関連）

・第一アンチノミーにおいては、テーゼもアンチテーゼも間違っているという結論に至る。なぜなら、「世界全体」という概念それ自身が、理性が作り上げた仮象、つまり純粋なみせかけとしてのみ存在するような理念だからである。第一アンチノミーは、偽の対立だったということになる。具体的な例として、カントは「あらゆる物体はよい匂いがするか、よい匂いがしないかのいずれかである」というような命題をあげている。ここでの対立は、「ある物体は全然匂わない」という命題においてもろくも崩れ去るのである。

・時間や空間は、物自体ではなく現象に過ぎないのだから、時間あるいは空間的な空虚によって限界づけられることはない。

・純粋理性の作り上げた仮象、それらが引き起こす諸テーゼの戦争状態。これこそが、カントが第一版の序文で「人間理性が拒絶することはできないが、しかし解答することもできないいくつかの問いにあって悩まされている」と語っているところの問い」のことである。

⇒このようにカントは難解である。理性に、純粋とか実践とかが付くだけで何のことやら理解に苦しむ。このようなことを考えて、人類の進歩や幸福の追求に貢献しているといえるのであろうか？（大草）

（アリストテレス関連）

・美徳を積むためには、実際に美徳を実践しなければ身につかない。バイオリンの演奏法をいくら学んでもバイオリンを奏でずにバイオリニストにはなれない。　いくら技術理論を学んでも、実践がなければその技術を上達させることはできない。

・アリストテレスの生物学と物理学に関する書物を読んでも真に受けることはない。しかし、倫理学や政治学に関する書物を読んでは相変わらず真に受け、考察している。

　（科学技術は進歩しているが、倫理学や政治学は進歩してないということか。大草）

・アリストテレスの奴隷制度の擁護論　：　奴隷制度が合理性を持つためには、①奴隷制度が必要であること、②奴隷制度が自然なものであることの二つの条件が必要とする。必要性は、ローマの貴族と市民の生活を支えるために奴隷が必要であった。一方、奴隷制が自然と言えるのは、奴隷になるように生まれてきた人達がいたことであった。奴隷にとっても、奴隷の状態が、有益にして公正と言える状態であったとのことである。但し、アリストテレスもさすがに全面的に奴隷制度を是認したのではなく、奴隷制反対の見解もある意味で正しいことは容易にわかるといっている。

⇒アリストテレスの奴隷容認論は、大半の奴隷は戦争で得た捕虜であったことを考えれば、破綻していると言わざるを得ない。しかし、奴隷制度は近年まで存在していたのであり、未だに人種差別は続いている。アメリカの奴隷解放1865年。アメリカでの女性投票権付与1920年。（大草）

⇒非人間的な労働をロボットに任せられないか。人間は、人格や幸福度を高めるための諸活動（文化、芸術、スポーツ、科学、動植物の育成、趣味、旅行など）に専念するようになれないものか。人類はいくら物質的に豊かになっても満足しない、精神的にまだまだ未熟な動物であると言わざるを得ない。アリストテレスの時代から科学技術は大進歩したが、倫理や政治の面ではさして進歩していないのではないか？（大草）

以上